平成5年（1993年）　9月10日　教皇様の声　（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
9　SEPTEMBER,1993　毎月10日発行　第161号

教皇様の声

真の富を望もう

（教皇様は一九六〇年のローマ・オリンピック当時、選手村のあった聖バレンタイン教区を訪問された。）

私たちは今、ルカ福音書の山上の説教の部分を聞いたところです。これは神の王国のおごそかな宣言とも言えます。福音の教えの要約であり、神の目から見て、人生で真に大切なこと、大切でないこととは何かを示してくれます。

ルカは「幸い」と「わざわい」という二つの言葉の違いを明らかにしています。幸いな人々とは貧しい人、餓えた人、泣く人、正義のために迫害される人です。彼らは天の国を受け、満たされ、喜び、大いなる報いを受けます。しかし災いなのは、富む人、満ち足りた人、笑う人、賞賛される人です。彼らはすでに報いを受けてしまったからです。

ここで、対照的な二つの価値観について…と言うより二種類の知恵について考えてみましょう。すなわちはかないこの世の知恵と永遠の神の知恵のことです。私たちを取り巻く現代の文明、存在することよりも所有することを尊び、他の何をも差し置いて金銭を崇拝する文明においては、福音書の至福八端の教えのみが私たちを物質的な不安から解放し、真に大切なこととは何かを教えてくれます。

至福八端は、イエズスが実現した根本的な価値観の変換を表しています。それは古い救世の約束の実現を宣言するものです。イエズスに対して「はい」と言う人は誰でも、自らが救いの歴史の一部となる喜びを多くの預言者たちと共にすることができます。しかし誰であれ主を拒み、福音を信じない人は自らに救いの可能性を閉ざし、至福八端の埒外に出て、「災いな人」の仲間に入ってしまうのです。

主は別種の富と、別種の貧しさを示してくださいました。それはこう言い換えることができるでしょう。「幸いなるかな」、貧しいあなた方は。実際には富んでいるのだから。災いなのは金持ちのあなた方だ。実際には貧しいのだから。使徒ヤコボも手紙の中で同じ考えを述べています。「神は世の貧しい人々を選んで信仰に富ませ、神を愛する者に約束されたみ国の世継ぎとされたのではないか。」（ヤコボ2・5）従って問題なのは、富んでいるか貧しいかではなく、この世のことに関して富んでいるのか、神について富んでいるのか、ということなのです。

キリスト信者たる者が、この世の事柄に信頼を置いてはならない。それらは本質的に不確実で過ぎ去ってしまうし、神が自分たちをお造りになった目的を忘れさせてしまう恐れがあるのだから。主の厳しい言葉は、こう教えています。預言者エレミアも同様のことを説いてます。「人によりたのむ者はのろわれる。…主によりたのむ者は幸せである。」

キリスト信者は神に信頼を置いています。彼らは神から出て、神に戻っていきます。この確実さは御子イエズス・キリストのうちにあります。聖パウロがコリントへの第一の手紙の中で述べたように、まさしく死者のうちからよみがえった御方なのですから、信仰を岩のように固め、罪の赦しを確実なものにしてくださいます。こうして、信者たちはこの世の現実を拒絶することなく、それらをより良く用いて神と兄弟姉妹たちに仕えます。この世のとりこになることもなく、世を偶像視することもありません。神のみが人間の幸福を保証してくださることをよく承知しているのです。

すなわち、「主に望みを置く人は幸い」です。詩篇1によれば、主の法を喜びとする人は、正しい選択をしたから幸いです。流れのほとりに植えられて、季節が来れば実を結び、葉も枯れることのない木のように。でも悪人は、風に吹き飛ばされるもみがらのようなものです。

キリスト信者はこれらの事実を心に刻み、さらに大きな熱意をもって実行に移さなければなりません。現代の一般的なものの考え方や行動となっていること、すなわち世俗化や消費主義、すぐに利益とならぬようなものには価値を認めぬ、隠れたニヒリズムから生まれた実用的物質主義の影響を受けている世の中で、それがいかに異質に見えようとも、これらのことを実行しなければなりません。

皆さんはあのオリンピックを思い出させる所にお住まいです。この教区では通りの名前にも、オリンピック期間中友情で結ばれていた多くの国々の名がつけられています。競技の名場面や、協力、安全、平和のための計画に尽力したことが思い出されます。そうです、陸上競技大会は福音の完成のために努力するキリスト信者が負うべき責任のシンボルです。

聖パウロのコリントへの第一の手紙の中に、こんなたとえがあります。使徒は、古代の町に住んでいた信者たちが、いずれ消えてしまう賞のためではなく、永遠の褒賞のために努力するよう勧めています。「競技場の競走ではみなが走るが、賞を受けるのは一人だけであることを知らないのか。あなたたちも賞を受けるために走れ。競技者はみな万事を控え慎む。それは朽ちる栄冠のためであるが、私たちは朽ちぬ栄冠のためである。」（Iコリント9・24～25）

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1993

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

一つ一つの生命は高価な宝

人間の生命の偉大さに対する驚異と感謝を

1　（…）私は世界の司教に宛てた書簡で「生命の福音」に言及しました。すなわち「私は羊たちに命を、豊かな命を与えるために来た。」（ヨハネ10・10）「私に従う人は闇の中を歩かない」（同8・12）と。教会に、そして教会によって全人類に、人間の生命の価値についてのこの良き訪れがとどろいています。偶然に生れる人は一人も居らず、各人は神の創造的愛の行為の結果であり、受胎の瞬間から神との永遠の交わりに召されているのです。

2　今の世では実に多くの人々が、人間とは何者であるのか、どこから来るのか、どこへ行くのかを忘れていますが、障害者の場合であっても一人ひとりの人間の生命の偉大さを不思議と感じ、ありがたいと思う感受性を一層強く人々に目覚めさせることが絶対に必要です。世俗化の圧力でこの事実が見えにくくなっている場合には特に、一人ひとりの生命がはかり知れない富であること、なぜなら生命の与え主である主からの独特の、掛け替えのない贈り物に他ならないから、という事実について考えることができるよう手助けする必要があります。「実に、あなたには命の泉がある」（詩篇36（35）・10）、「私は彼らに永遠の命を与える。」（ヨハネ10・28）テクノロジー万能の風潮に圧倒され、人間人格の持つ偉大な神秘への感受性を失いがちな今の世に向かって、神は一人ひとりを愛しておられるというすばらしい便りを繰り返さなければなりません。これこそ天と地、見えるもの、見えないもの全ての創造主である神への、私たちの信仰の一部を成すものに他ならないのです。

3　例外なく全ての生命を受け入れ、愛さなければなりません。回勅「新しい課題」で警告した「死の文化」の如きは、一人ひとりの人格に対する愛と対立するものであって、父であり創造主である神への信仰全体の、まさに中心となる真理をぼかしてしまう危険があります。この前に召集された枢機卿臨時会議で、次のような満場一致の要請がなされました。すなわち人類史上前例を見ない、多数の死の原因となっている最も由々しい現象と言うべき、生命に対する攻撃と脅威との増大に今こそ終止符を打つために、世界中が立ち上がらなければならない、と。

4　人間一人ひとりが受胎の瞬間から一個の人格であって、無邪気な偉大さを持つ胎児を侵略者のようにみなすことは真理に反します。今日、不幸にも生命を排斥する態度や行動が存在すると言わざるを得ませんが、これによって、まず避妊という道徳的な不法、次いで堕胎という忌まわしい犯罪が引き起されるのです。このように生命を敵視する考え方は、その意図や関心が何であれ、それ自身すでに非人間的であり、不正です。社会と社会を構成する一人ひとりが、個人として、公務員や立法議員として、めいめい自分の責任に応じて生命を受け入れる傾向を作りだすことが急務です。生命と、生命の賜をもたらして神の協力者となる女性の尊厳に対し、明らかに好意的な政策が必要です。両親が子供を望まない場合でも家庭を構成する両親が新生児に対してつねに直接の責任を負うことに変りはないとは言え、生命を歓迎する組織と方法とが不可欠です。父、母、兄弟姉妹がいて愛に満ちた家族の中に、一人ひとりの子供が生れることのできるよう、「生命の聖域」である家族は効果的な支援を受けなければなりません。（「生命のはじまりに関する教書」参照）

5　生れた以上、子供は、人間としての成熟を遂げることができるよう育ち、愛され、十全な発達を遂げるための助けを受ける権利があります。実際、もし人が愛することを学ばず、愛されていると感じないならば、その人は自分が現実に誰であるかを決して知ることができないでしょうし、むしろ自分自身が不可解な神秘となるでしょう。

6　というわけで、あらゆる人の手を借りて人間と人格の発達に適した環境を創造する、一種の人間生態学（環境学）への公共的参加が必要になります。それには確かに物的条件の改良も必要ですが、何よりも人間自身をそのまま、ひたすらに愛する雰囲気を作り上げることが絶対に必要であり、それによって人は生きる喜び、仕える喜び、働く喜び、また全ての人と友好的な関係を育てる喜びを学んでいくのです。この観点から必要なのは、教育方法やマスメディアを改良して、今日しばしば精神の諸価値に盲目となっている道徳的環境その他の文化局面を一新することです。これらを実行し得る第一の基本単位は、他ならぬ家族です。ここで人は初めて、人格を形成していく諸経験と出会い、真理と善についての最も貴重な教訓を受け、こうして愛し、愛されることを学びます。

7　結婚に基づく家庭を、保護し、援助するよう努めましょう。男性と女性がお互いに助け合って愛の風土を作り上げ、その中で子供が生れ、育つことのできるように。家庭、すなわち父性・母性に好ましい環境を用意しなければなりません。家庭自身の持つ貞節、豊かさ、他者への率直さによって高められた親密さなどの美点を推進しなければなりません。家庭はあらゆる社会・政治的政策の中心となるべきなのです。

皆さんが互いに協力し、合法的な多様性を尊重しつつ証される人間の尊厳、価値、生命への証の質にこそ、最も偉大な力が存在します。

8　「死の文化」が今日陰に陽に発揮する力は、大規模で強力です。すなわち、人間の利己主義とその結果である消費主義、母性を恐れる浅薄なフェミニズム、精神的諸価値の優越を理解することができない物質主義の増大、そして情け容赦もない経済利益第一主義の圧力、など。

これに対して、聖パウロがローマの町の初代キリスト信者たちに向けたのと同じ言葉を、皆さんにも申し上げたいと思います。「悪に勝たれるままにせず、善をもって悪に勝て。」（ローマ12・21）皆さんの武器は福音です。福音は、死の征服者であるキリストの復活という堅固な基礎の上にあるがゆえに、尽きぬ希望を含んでいます。（…）願わくは聖母が御子と共に世界中の全ての母親、「生命の聖域」である全ての家族、そして皆さんと皆さんの家庭、活動、皆さんが光、塩、パン種となるべき国々を祝福してくださいますように。

説教・講話・書簡等の抄訳

アペニン山中からのアンジェルスメッセージ

（司牧旅行のためイタリア各地を回っていた教皇様は、中部イタリアの最高峰グラン・サッソ山で山上の礼拝堂を祝福し、集まった人々と共にお告げの祈りを唱え、短いお話をされた。）

★　兄弟姉妹の皆さん。

グラン・サッソ山のすばらしい景色の中、いま祝福した簡素で美しい礼拝堂のかたわらで、有名でもあれば私にとっても目に親しい雄大な風景に包まれて本日のような集まりを持てるのは嬉しいことです。山の静寂と純白の雪は訪れる者に神のことを語りかけ、瞑想に誘います。それは秘義を体験するのに最上の方法であるのみならず、人間らしい生活を送り、人々と交わるための条件でもあります。

★　今日、時に身をすりへらすほどあわただしい日々の生活の中、少し歩みを止めてみる必要を痛感します。自然に触れ、その美しさと平和から力を得て、元気を取り戻すのです。宇宙の驚異に目を見張りつつも自分自身の心の中をのぞきこみ、自らの存在の核心、良心と出会う場所を見つめるのです。そこで神が私たちに話しかけてこられます。こうした神との対話が、人生に意味を与えてくれます。

★　ここにお集まりの皆さんの努力で美しく生れかわったこの礼拝堂は、ここを訪れて休む登山者全てに超自然の世界を語り、神の現存を示し、祈りへと招いています。皆さんも清新な祈りの空気をこの場に吹き込んでくださっています。それは皆さんの歴史や文化、あえて言うなら「聖性」にふさわしいことです。実に皆さんは、山の美と、厳しさと、神秘と、魅惑から大きな影響を受けてこられました。山の神秘は勇気ある挑戦者にのみ明かされます。そのためには犠牲と訓練が必要です。谷間の安楽を離れねばなりませんが、山頂をきわめる勇気を持つ者の前には、息をのむ景観が広がります。魂の旅路も、本質はこれと同じです。地上から天の国へと昇り、神に出会うのです。皆さんはこの神秘の言葉をよくご存じでしょう。それに耳を傾ければ、皆さんの国家への奉仕は全く自然に平和と連帯への奉仕となるでしょう。（…）

★　この山々から、私の思いはこの地方全体、特に一九八〇年に訪れたラクイラの教区へと向かいます。（…）司教と司祭方の模範的な熱意が、家族のための使徒職に捧げられています。家族の一致と平安が脅かされ、土台からむしばまれようとしているこの困難な時代にあって、このような使徒職にはおおいに後押しをするべきです。社会と教会の双方がこの基本的な企てのために最良の努力を払う必要があります。キリスト信者の家族が社会の真のパン種となり、「家庭教会」としての使命に生き、福音から力を受け、よく祈り、柔和さに富み、よい証人となれますように。

★　兄弟姉妹の皆さん、この礼拝堂の中で雪の聖母という美しい名で称えられている聖マリアに全てを委ねましょう。周囲の自然景観の美しさのゆえのみならず、信実なる処女、全く美しく、汚れない方マリアの秘義を思い起させてくれるという理由から、この呼び名は当を得たものと言えましょう。聖母よ、私たちにキリストへの忠実を保つ道をお教えください。勇気と信頼をお与えください。この国と、また特別に家族と若者たちを祝福してください。

聖体祭儀のための司祭叙階

教会シリーズ 15

1

聖体に関わる司祭の使命を完全に理解するには、この秘跡が何よりも十字架上の犠牲（いけにえ）と贖いのわざの中心となるあの瞬間を、祭壇上で再現することであることを考えればいいのです。司祭であり、いけにえでもあるキリストは、御父への従順によって普遍の救いを成し遂げました。キリストは新しい永遠の契約の大司祭であり、私たちの救いを成し遂げることで旧約の古い祭儀では予見にとどまっていた完全な礼拝を御父にお捧げになったのです。十字架上でご自身の血を流すいけにえによって「ただ一度だけで永久に至聖所に入り、永遠のあがないを成し遂げられた。」（ヘブライ9・12）　こうして主は古いいけにえをすべて廃止し、御父の御旨にしたがって自らを捧げる（詩篇40(39)・9）ことによって新しいいけにえを定めました。「この御旨によって、ただ一度で永久に捧げられたイエズス・キリストのお体の捧げ物によって私たちは聖とされた。…キリストは、ただ一つの捧げ物をもって、聖とされた人々を永久に完全にされた。」（ヘブライ10・10、14）秘跡を通して十字架の犠牲を更新する司祭は、教会と全世界のために再びこの救いの源を開くのです。

2

こうした理由で、一九七一年の世界代表司教会議では、第二バチカン公会議の説くところに従って次のように指摘しています。「司祭の使命は、教会一致の源であり中心である聖体祭儀において頂点に達する。」（バチカン便覧、IV,1166; 教会の宣教活動に関する教令、39番参照）「教会憲章」が主張するように「司祭は聖体の祭儀または集会の儀においてその聖務を執行し、そこではキリストの代理者として行動し、キリストの秘義を宣べ、信者の祈りをそのかしらの供え物に結び合わせ、新約の唯一の犠牲、すなわち自分を汚れない供え物として父に一度捧げたキリストの犠牲を、主の到来までミサの犠牲において現存するものとし、それを適用させる。」（前掲書28番参照）

これについて「司祭の役務と生活に関する教令」は二つの基本的な主張を述べています。

1、この共同体は、全員が自らを霊的捧げ物とすることができるよう、福音の宣布によって集められた。

2、信者の霊的完成はキリストの犠牲と一致することで完成され、司祭の手で血を流すことなく秘跡的な仕方で捧げられる。司祭の役務は全て、この一つの犠牲から力を引き出しているのである。（前掲書2番参照）

司祭は秘跡の中で
キリストご自身になる

不変の教え

3　このことは、信者の職位的司祭職と共通司祭職のつながりを示しています。同時に全信者の中でも特に司祭は、自分自身が神秘的に、すなわち秘跡的にキリストとなって、聖トマス・アクイナスの美しい表現を借りれば「司祭でありホスチア」と化さねばなりません。（Summa Theol., III,q.83, a.1, ad 3参照）　聖体祭儀を行う司祭は、イエズスの言葉を唱える時、役務の頂点に達します。「これは私の体である…これは私の血の杯である…。」　この言葉であの偉大な力が発現し、司祭はキリストの犠牲を目の前に持ってくることができるのです。こうして共同体は秘跡的な方法で、従って神的効果をもって真に築かれ、発展していきます。聖体が交わりと一致の秘跡であることは、一九七一年の世界司教会議でも、最近の教理省の書簡「交わりとしての教会について」（Communionis notio, 11参照）でも主張されている通りです。

4　というわけで、聖人伝の至る所に見られるように、聖なる司祭たちがミサをたてるたびに示した敬虔さと熱意も理解できます。彼らは事前に十分な準備をし、ミサ後にはふさわしい感謝の行為を忘れませんでした。そこでミサ典礼書には感謝のための祈りがのせられており、時には特別なカードに印刷して、聖具室に置いてあることもあります。「司祭と聖体」というテーマに関しては、司祭の霊性を説くさまざまな著作があり、司祭はいつでもそれらを参考にすることができます。

5　ここにもう一つ、今考察している司祭と聖体についての神学に関する重要な点があります。すべての役務とあらゆる秘跡は聖体に向かうということです。「聖体祭儀の中に教会の霊的富のすべて、すなわちわれわれの過ぎ越しであり生きたパンであるキリスト自身が含まれている。（神学大全III, q.65,a.3,ad 1; q.79,a.1）　キリストは自分の肉、聖霊によって生き、また生かす肉、によって人々に生命を与え、こうして人々が自分と自分の労働とすべての被造物を自分と共にささげるよう招き導く。」（司祭の役務と生活に関する教令、5番）

秘跡の生活は聖体に向かう

6　ですから、聖体祭儀にあずかる私たちは、大司祭キリストが全被造物界を代表して御父に捧げる完全無欠の礼拝に、最高度に参加しているのです。自分の生命がこのように深く聖体と結ばれていることを知る司祭は、自らの精神が地球的規模にまで広がり、この世と天の国までも視野におさめていると感じる一方で、「教会の霊的富のすべて」であるこの宝を、共同体に伝える必要と責任がいや増してゆくことに気づきます。従って、司牧の役務の企てと計画においては、信者の秘跡生活が聖体を目指している（前掲書参照）ことを念頭に置き、キリスト信者の形成が聖体祭儀への積極的・意識的な参加を目標とするよう心がけるべきです。

7　今、聖体祭儀がキリスト教生活と使徒職の中心として非常に大切であることを再認識しなければなりません。信者たちのミサへの出席率は、はかばかしくありません。多くの司祭たちの熱意のおかげで、人々が熱心かつ積極的にミサにあずかるようになったとは言え、出席率はいぜんとして低いのです。この方面での統計は内的生活に関わる他の分野よりもはるかに相対的なものです。さらに言えば、内的生活の真の価値は外に表れた礼拝で決まるものではありません。とは言え外面的な礼拝が、通常内にあるものの論理的かつ必然の結果である（聖トマス・アクイナス「神学大全」II-II, q.81,a.7 参照）ことは否定できませんし、聖体祭儀の場合、礼拝は大司祭キリストとその贖いの犠牲への信仰そのものを意味しています。さらに、キリスト教信仰の活力は福音と完全に一致した行いに表れるのであって、典礼行為に示されるのではないということをもとに、礼拝や祭典の重要性を過小評価するのは賢明とは言えません。実際、聖体祭儀は単なる典礼行動ではなく秘跡、すなわちご自身の愛の力を私たちに伝えるための、キリストによる仲介なのです。キリストご自身である聖体から力を得ることなく、福音と一致して生きられるなどと主張するのはとんでもない心得違いと言うべきです。聖体はそのためにこそ定められた秘跡なのですから。そのような主張は基本的に、自己満足にひたった反福音的態度と言えるでしょう。聖体はキリスト信者に、福音の要求に従って生きるための大きな力を与えてくれます。各自が属する教会共同体の完全なメンバーにしてくれるのです。聖体は信者たちに教会と交わる喜びを与え、新たにしてくれます。

ミサ以外の聖体礼拝を盛んに！

8　従って、信者が聖体祭儀に参加するよう司祭はあらゆる努力を払って要理教育や司牧上の勧めを行い、また典礼的・儀式的にすぐれた祭儀を行うべきです。そうすれば公会議が（司祭の役務と生活に関する教令、5番）強調するように、ミサの犠牲において父なる神に神的いけにえを捧げ、そのいけにえと共に、兄弟姉妹への奉仕という形で自らの生活をも捧げるよう信者たちに教えることができるでしょう。信者はさらに罪の赦しを願い、神の言葉を黙想し、教会と世界が必要とする全てのことのために心から祈り、救い主キリストに全幅の信頼を置くことを学ぶでしょう。

9　最後になりますが、司祭はミサ以外でも、聖体への礼拝を勧めるべきであることを申し添えたいと思います。自分の教会がキリスト信者の「祈りの家」に、すなわち公会議の表現を借りれば「われわれのためにいけにえの祭壇において捧げられた救い主である神の子の現存が、信者の助けと慰めのために礼拝される場所」（同5番）となるよう、全力で努めるのです。この家は祈りのためにも、その神聖な役割のためにも、ふさわしい秩序を保ち、清潔で整っており、また芸術的な美を備えていなければなりません。祈りを形作り、鼓舞するために非常に重要だからです。こうした理由で、公会議は司祭が「典礼学と典礼芸術の教養を深め」（同5番）るよう勧めています。

10　このような点に注意を促すのは、これらも、とりわけ教区司祭や教会その他礼拝の場所の責任者がなすべき「魂の世話」という複雑多岐な仕事の一部だからです。ともあれ、教会が教えるように、司祭職と聖体との間には密接な関係があることを強調したいと思います。私も深い霊的喜びと自信をもって繰り返しますが、司祭とは何よりもまず聖体の人、キリストのしもべ、古代の教父と博士たちの教えを要約して公会議が述べるように「教会の霊的富の全て」（同5番）が含まれる秘跡の役務者なのです。全て司祭は、どのような状況にあっても、どんな種類の仕事に携わっていても、世の贖いのために十字架上で成し遂げられ、祭壇上で新たにされる過越の秘義のしもべ、役務者なのです。（一九九三・五・十二）

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費　■一年予約九百円　送料六百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393